

宇治サッカースポーツ少年団連盟 フィロソフィ

サッカーの本質は「ゴールを奪う!」「ゴールを守る!」だとすると必要なものが見えてきます。サッカーをするうえで技術の習得は欠かせませんが、それ以上にチームゲームであることを忘れてはいけません。仲間がいるから、相手がいるから、そして審判がいるからゲームは楽しくなります。子どものためにサッカー環境をより良いものにしたいとの想いから「宇治みらい塾」を始め、宇治サッカースポーツ少年団連盟としてのフィロソフィを創りました。

キャッチフレーズは「う・じ・さ・か」

う

うじの子ども達にサッカーを好きになってほしい

～「大切なこと」を育むために必要なこと～

海外と日本の子どもの一番の違いは、「楽しみながらプレー」する子どもの少ない事だと思います。本来、スポーツ（サッカー）は「自発的に楽しむ」はずなのに、いつの間にか修行と化し、笑顔でいると「真剣にやっていない」と怒られる。そこにはミスをしないように、指導者に怒られないように、親の期待に応えようとする子どもの姿があります。「楽しみながらプレー」の実現には、子どもや指導者だけでなく、家庭の理解と協力が不可欠です。子どもにサッカーを好きになってもらうには、まず興味を持たせることに重きを置きます。夢中になれば、上手になりたいために自らサッカーの練習を行うようになります。

指導者の役割は、「サッカーを好きになってもらうこと」「子どもの個性や特徴を伸ばすこと」そして「サッカーをもっと上手くなるためにはどうするか自ら考え答えを出す習慣をつくること」です。

じ

自分でチャレンジできる子になってほしい

～それができれば子どもが育つ～

幼いころから「サッカーとは何か?」を考え、学ぶ必要があります。

指導者が変わろうが、年齢が上がり求められるものが変わっても、「そこで決断する、判断するのはキミ自身」ということを、大人（指導者）は伝えなくてはなりません。しかし、時には「何も教えない」ことで、ゼロの状態からどういう行動をとるべきかを考

えさせることも必要です。多くの選択肢の中から「何が最善か」判断しチャレンジする。サッカーに100%の正解はなく、子どもが「答え」を求めても、できるだけ自分で考えてもらう。そういう状況を大人（指導者）が提供してあげることが、サッカー選手としてだけでなく、人として大きく成長させることになります。重要なのは、結果ではなく、自ら考えチャレンジした子どもの努力や工夫に対して認めること。そこに「失敗」という言葉は不要です。チャレンジを繰り返すことが成長につながっていきます。

さ

サッカーを通じて「良い大人」になってほしい

～技術指導以上に大切なこと～

サッカーを語る上で忘れてはならないのが、デッドマール・クラマー氏（日本サッカーの父）の「サッカーは少年を大人にし、大人を紳士・淑女にするスポーツだ」という言葉です。さまざまな挫折、敗北を経験し、勇気と覚悟をもってチャレンジすること、そうした困難を乗り越えたとき「リスペクト」の気持ちも生まれます。

技術を教えること以上に、「アドバイスを素直に聞き入れる人間性」「自分のためだけでなく仲間のため、チームのために何が必要かを見分ける判断力」それを「実行する行動力」を磨くことが良い選手・良い大人に育てることになります。

か

海外標準を目指して指導者全体のレベル向上を図る

～技術指導だけでは良い選手は育たない～

日本のスポーツ指導では、「勝つこと」や「完璧であること」、「真面目にやること」などが重視されがちです。そのため、ミスすれば怒られ、コーチの指示通りにやらないと注意されるといった「減点主義」の指導が、いまだに常態化しています。

海外のスポーツ指導は概して「加点主義」。子ども一人ひとりの個性や長所が伸びるよう、積極的なチャレンジを促しつつ、認めて伸ばすという方針が浸透しています。

子どもはミスを恐れることなく、思い切り伸び伸びとスポーツを楽しむことができ、本来持っている能力を最大限活かすことを重点に指導が行われています。さらに重要なことは、子どもは自らの想いや考えを言葉で表現し、相手に正しく伝え議論ができること、大人（指導者）は共に考え、無限の可能性を持つ子どもの成長にブレーキを掛けないことが大切です。